

て活かす“道”の選択。

就職戦線を
読み解く

其の参

学術的専門研究

+

実践プログラム

イノベーションスキル・プログラム

アイデア・トレーニング・キャンプ
エンライトメント・レクチャー
ビジネス英語

共同研究・派遣プログラム

産学連携教育研究プログラム
国際教育研究プログラム

目指す人材養成

国際的で産業界の
ニーズを知る博士

多様な場で活躍できる
高度な専門的研究者

若手研究者の探究心を、 社会に役立てるプログラム。

文部科学省科学技術振興調整費「イノベーション創出若手研究人材養成」プログラムへの応募・採択により、昨年7月に誕生した「岐阜大学イノベーション創出若手人材養成センター」。
ここでは博士後期課程の学生、および博士号取得後5年程度の研究者で、かつ企業への就職を希望する人に向けた「実践プログラム」を用意し、社会に通用する幅広い知識とスキルをもつ人材の輩出を目指しています。

モノづくり日本を支える開発力は
ドクターの育成にかかっている。

少子化が進むなか大学や教育研究機関のポストが減少し、企業からは「扱いにくい」と敬遠されがちな博士号（ドクター）取得者の現状。努力してドクターになってもその先の進路が無い、または評価が低いとの理由から、博士後期課程を志願する修士学生が年々少なくなっています。実際問題、全国で毎年1万5000人ほど誕生するドクターのうち、三分の一は仕事が無いという厳しい状況。これを放置すれば、日本に若手研究者が生まれにくい、あるいは優秀な人材が海外に流出することにもなりかねません。

ご存知のように、日本は「モノづくりの国」として技術開発力の高さを世界にアピールしてきました。将来的にも、その基盤を揺るぎ無いものにするなら新しい発想を

持った研究者の活用は必須だと考えられます。だからこそ文部科学省も、今の実情に危機感を募らせ、こうしたプログラムを作って大学院教育の改革を本格的に進めていくわけです。

研究者に必要なのは
プライドよりも職業意識。

博士後期課程に進む人の多くは、大学の教員や研究員の方向を望みます。しかし、その道のみこだわれれば八方塞がりとなり、やがてモラトリアムな意識が支配します。「自分の居場所はどこじゃない」。そんなプライドばかり高く言い訳の多いドクターに仕事は回って来ない。自分の能力を生かすにも、やはり職業意識は大事。それを持てばチャンスは広がるはず。

そこで当センターは「イノベーションスキル・プログラム」と「学

外研修プログラム」を設け、企業で働くためのスキルとマインドを徹底レクチャー。異分野の研究者たちとの交流を図り、企業で働く先輩ドクターや有識者を招いた講義やビジネス英語講座を開講し、その後、ドクターが希望し受入れ可能な国内・海外の企業等へ派遣します。企業派遣は、学生の視野を広げることはもちろん、企業に本プログラムに参加しているドクターが良い人材であることを気付かせるのも狙い。学生には3〜6ヶ月スパンで企業ニーズに合う研究に従事してもらい、その間の賃金・保険・交通費、さらには研究費まで大学が負担します。

4月19日には「岐阜大学イノベーション創出若手人材連携育成会」が発足し、受入先企業に県内メーカー20社の登録がありました。今後、この輪を近隣他県および全国へと波及させていくのが当センターの務めであり、目標です。

センター長
理事（教学・附属学校担当）・副学長

岡野 幸雄

専門分野は生化学・分子生物学。がん研究をテーマに、がん遺伝子オーロラをヒトからクローニングし、DNA修復タンパク質分解を介した細胞増殖の分子機構を解析。昨年3月まで医学系研究科・分子病体学分野教授



副センター長
工学部・人間情報システム工学科教授

川崎 晴久

2006年、5本指の人間型ロボットハンド「岐阜ハンド」の開発で文部科学省大臣表彰「科学技術賞」をはじめ、数々の賞を受賞。昨年は多指触覚インターフェイス「HIROⅢ」の開発で第8回産学官連携功労者表彰「総務大臣賞」を受賞。



〳 大学院生必見!
研究者を支援している
先生に伺いました!!



博士後期課程に進む大学院生のための就職 好きな分野を究め



「女性研究者の育成」から導く ライフデザインの描き方。

性別に関わりなく、それぞれの個性と能力が発揮できる社会の実現を。そんな大テーマを掲げ、昨年4月に設置された「男女共同参画推進室（人事労務課男女共同参画係）」事業の柱は、「意識改革」「女性研究者育成」「女性研究者支援」「人的資源循環支援」。

林正子副学長を室長に、学内のみならず地域行政や企業とも連携した事業・プロジェクトを展開し、学生の就職に対する意識改革、自己実現のための機会創出を積極的に図っています。

学生の人生観や価値観を養成する機会を提供するのも、大学の使命。

岐阜大学では、目下、文部科学省科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」事業（採択課題名「多様性活力発揮に向けての女性研究者支援」）に取り組んでいます。「意識改革」「女性研究者育成」「女性研究者支援」「人的資源循環支援」の四つの柱から成るこのプログラムのうち、「女性研究者育成」の項では、「サイエンス夢追い人」育成プロジェクトを展開しています。ちなみにこれは、女子大学院生が小中高校に出向き、自分の研究内容を生徒達に分かり易く紹介していく「出前講義」。未来を担う子ども達に理系への興味・関心を喚起させると同時に、研究者自身のモチベーションやスキルアップを図ろうとするものです。しかしながらこの事業、プロジェクト

トの根底にあるのは、女子大学院生のみならず全学生に向けた大学としての「就職支援の想い」。つまり：自分の好きなことは何か、それを生かす道筋とは何か、そしてそこにある課題を引き受ける大切さを、学生達に考えてもらおう機会の提示でもあるということです。

例えば、「リケジョ」を貫く強い意志が、生き方を左右する。

働きやすい職場とは何でしょう？ また職場における男女の特性や個々の資質の生かし方は、どうあるべきでしょうか？ 自分の中で、そうした理想や価値観の養成がなされないまま、単純に知名度や安定性から企業を選んでしまうと、就職活動の段階で失敗に終わる、あるいは運よく就職できても「合わないから」と早々に退職するという事態も起こります。いわゆる「就職のミスマッチ」です。職に就



副学長(男女共同参画推進・環境対策担当)
地域科学部 教授

林 正子

研究分野は日本近代文学。『異郷における森鷗外、その自己像獲得への試み』『郷愁と憧憬の人生と文学』『〈東海〉を読むー近代空間と文学』など、共著を含め著書多数。



くことは人生の全てではありませんが、新たな生き方を左右する上で、大きなステージになることに間違いはありません。ですから大学は、この「男女共同参画推進」の活動を通じ、一人でも多くの学生に「職」に対する意識改革と、自己実現のための「気づき」を啓発し、ライフデザインの描き方を発信しているわけです。例えば「リケジョ」の女子高生が、身近な女性研究者の出前講義やロールモデルに共鳴して「好きな道」に進む決意をするように。学生たちに「コレがやりたい」という意志を最初に持つ大切さを、今後も具体的に示していきたいと思っています。

男子も
一見の価値
アリ!



岐阜大学
女性研究者ロールモデル集
19名の女性研究者の方々からそれぞれメッセージをいただき、まとめた一冊。ロールモデルたちの行動や考え方が非常に参考になる。